研究所活動報告

【学生ルポ】

『日韓メディアトークー日韓関係 100 年について考えるー』

2010 年、日韓併合 100 年を振り返る年にちなんで、公営放送メディア NHK と KBS より講師をお招きし、ジャーナリストの視点からトークしていただいた。下記は、トークに参加した神田外語大学の学生が講演会について取材した内容である。（編集：阪田）

日時：2010 年 6 月 22 日(火)　17:00～18:40（開場 16:50）
場所：神田外語大学　7 号館クリスタルホール
講師：出石直（いでいし・ただし）（ＮＨＫ日本放送協会解説委員；前ソウル支局長）
　　金大弘（キム・デホン）（ＫＢＳ韓国放送公社記者、東京支局特派員）
司会＆コーディネーター：
　　阪田恭代　（本学　国際コミュニケーション学科教授）
　　豊島悠果　（本学　韓国語学科専任講師）
共催：国際社会研究所、国際コミュニケーション学科、韓国語学科

学生レポーター（2010 年度）
　星有希（英米語学科 4 年）
　林有莉（英米語学科 3 年）
　森光瑠（英米語学科 3 年）

菅原ちひろ（英米語学科 3 年）
来間さやか（国際言語文化学科 3 年）

1. はじめに

2010 年 6 月 22 日（火）、神田外語大学 7 号館のクリスタルホールにて「日韓メディアトーク」が開催されました。NHK 日本放送協会の解説委員であり元ソウル支局長の出石直（いでいし・ただし）氏と、KBS 韓国放送公社記者・東京支局特派員の金大弘（キム・デホン）氏を講師にお迎えし、日韓併合から現在に至るまでの 100 年間の歴史を振り返るとともに、将来の日韓関係の在り方についてお話いただきました。

現代の国際社会において、東アジアをリードする存在になった日本と韓国は、お互いを無視できない関係にあります。近年では音楽や映画・ドラマなどの大衆文化が両国間を往来し、文化面での交流が活発になっています。その一方で、日本の植民地支配によって生まれた溝が両国の間に深く残り、政治・安全保障面での連携はまだ発展途上の段階にあると言えます。

メディアという仕事を通じて日本と韓国を見つめてきた出石氏と金氏は、日韓関係の過去、現在、そして未来を、どのように見ているのでしょうか。そして、私たち学生にどのようなメッセージを伝えてくださったのでしょうか。

2. 講師のお話

出石氏：

出石氏は、1910 年の日韓併合から現在までの日韓の関係を、独自の考察を交えて振り返り、これからの日韓関係の展望についてお話して

くださいました。

出石氏はまず、日韓併合から現在までの時代を、「植民地時代」(1910-1945)、「断交期」(1945-1965)、「軍政期」(1965-1988)、「民政期」(1988-1998)、「未来志向期」(1998-)の 5 つの時代区分に分け、日韓両国のこれまでの歩みを紹介しました。近年は、「未来志向期」から「成熟期」への移行の兆候が見られるといいます。

日韓関係に関して、「日韓併合が日本による一方的な侵略行為であったために、韓国の日本に対する不信感、警戒感を払拭することは難しい」という悲観的な議論もありますが、出石氏は、良好な日韓関係を構築する環境・準備が徐々に整いつつあると考えています。その根拠として挙げられたのは、「大衆文化の開放」、「旅行者の増加」、「韓国の経済力の向上」の３つです。出石氏によると、「大衆文化の開放」と「旅行者の増加」は、未来志向期である 1998 年ごろから予想を上回る急速な発展を見せ、日韓関係に大きな影響を与えました。2000 年代に日本で韓流ブームが起こったことは記憶に新しく、韓国の音楽やドラマ・映画などの大衆文化が大量に流入し、近年韓国を身近な存在と感じる日本人が増えました。韓国においても若い世代の人を中心に、日本の漫画やアニメが親しまれるようになっています。両国間の旅行者の数も年々増え、2007 年は一年間に約 490 万人もの旅行客が相方の国を訪れました。

出石氏は、このような文化面における交流の急速な発展は、予期されていなかった「嬉しい誤算」であり、それによって日韓が「近くて遠い国」から「近くて近い国」へと変容を遂げた、と述べました。また、「韓国の経済力の向上」については、韓国の経済力の拡大とそれに伴う政治的発言力の強まりが、日本と韓国の「大きい国」「小さい国」という差異を無くし、真の意味での対等な関係になったと述べました。経済面においては、ゴールドマンサックスの GDP 国民総生産見通し(2050 年度予測)のデータを用

い、韓国経済が今後も成長を続けると予想されていることを紹介しました。政治面においては、2010 年の秋にソウルで開かれる G20 の首脳会談に触れ、初めて首脳会談が日本以外のアジアの国で開かれることを歓迎しました。

出石氏は、以上のように今後の日韓関係に対して明るい見通しを述べました。一方、両国の間にくすぶる歴史問題や領土問題は、完全に解消することはないと指摘しました。そして、これらの諸問題を克服するためには、長期的に取り組んでいくことはもちろんのこと、日韓両国の若い世代が交流を深めることが必要であると締めくくりました。

金氏：

金氏は、KBS の特派員として 2 年間日本に滞在してきた体験談を踏まえ、深化しつつある日韓関係についてお話して下さいました。

金氏は、日本のメディアが流す情報の中から、政治・経済・文化・科学などの分野において韓国と関わりがあるものや、北朝鮮関連の情報など、韓国人が関心を持つような情報を選んで、毎日リポートを制作しているそうです。その一日は非常にハードで、毎朝午前 4 時に出勤し、日本の新聞やテレビのニュースに一通り目を通し、その日取り上げる題材を決め、リポートを一件作成し、夕方頃までにソウルの本社に送るそうです。金氏は、「特派員の仕事は大変だが、日本で生活する上で生活習慣の違いや国民性の違いなど多くのことを知ることができるのは喜ばしく、この仕事が気に入っている」と述べました。

2009 年の政権交代や日本航空（JAL）の破産など、金氏はこれまでたくさんのニュースを取材してきましたが、その中でもフィギュアスケート選手の金ヨナと浅田真央の取材は、日韓関係を考えるために大変意義があったと感じているそうです。なぜなら、今までフィギュアスケートはヨーロッパ中心の競技で、高い身長に強靭な体力のあるヨーロッパ・ロシアの選

手がメダルを獲得してきました。しかし今はアジア勢である金ヨナと浅田真央の二人が世界のトップを競い合っています。両選手が 10 代のころからライバル関係にあり、互いに切磋琢磨しながら共に成長してきた様子は、今後のより良い日韓関係の在り方を象徴していると金氏は考えています。つまり、互いに健全なライバル意識を持って競争し、時には協力していけば、日本と韓国は世界をリードしていける二か国になりえる、ということです。

また、金氏は自身が日本で取材をし、実際に KBS で放送されたニュース映像を見せて下さいました。その約一分半のニュースは、今年 4 月に横浜で開催された、朝鮮戦争の様子を日本の従軍記者が撮影した写真の展示会を取材したものでした。この展示会は、博物館の関係者が、朝鮮戦争の悲惨さを日本人にも知ってもらいたいと企画したものだそうです。金氏は、この展示会のように、日本人が朝鮮半島の歴史に触れることも、より良い日韓関係を築いていく上で重要であると述べました。

さらに金氏は、今年朝日新聞と東亜日報（韓国）が共同で実施した世論調査の結果を紹介し、それについてコメントをしました。調査結果によると、「相手の国に対して親しみを感じるか」という質問に対して、日本人が韓国に対して親しみを感じると答えた人は全体の 55%、韓国人が日本に対して親しみを感じると答えた人は 42%でした。この結果については、どちらの国も相手の国に対する親しみを同等程度感じていることが伺えます。しかし、植民地問題を含む歴史問題に関する質問では、日本では 39%が「決着した」と答えたのに対し、韓国では 94%もの人が「日本の謝罪は不十分」と答えています。この結果から、日本と韓国の歴史認識の違いに問題が残されていることがわかります。

最後に金氏は、日本人と韓国人は、個人としては相性が良いものであるというお話をされました。金氏によると、もともと日本と韓国は言語や生

活習慣など、文化的に似ている部分が多く、ビジネスにおいても欧米と組むより上手く行きやすいと言えます。そして、歴史問題ばかりに足を取られているのではなく、様々な面において互いに切磋琢磨し、時には手を取り合うことで、双方にプラスになることが自然にできればいい、と締めくくりました。

3. 質疑応答

質疑応答では政治から文化まで幅広い質問が学生や聴講生の方から寄せられました。その中でも特に印象深いものをいくつか紹介します。

一つ目は今年 6 月に韓国で行われた統一地方選挙についての質問です。「最大与党であるハンナラ党がなぜ民主党に敗北したのか」という問いに、金氏は韓国の政治が同じ地域の出身者に投票することで地域別得票率に大きな差が出るという地域対立から、保守主義・革新主義などの理念対立に変化したことを背景として挙げました。出石氏はさらに、今年 3 月の天安哨戒艦沈没事件をあげて、韓国内の世論が対北朝鮮融和派と強硬派に分かれており、北朝鮮に対する「強硬」路線が「戦争」を誘発すると懸念した世論がハンナラ党に不利に働いた結果でもあったと説明されました。徴兵制のある韓国ならではの国内事情であると言えます。

二つ目は国民性の違いについての質問です。「韓国人は日本人よりも熱狂的で、スポーツ観戦など、多くの人々が集まって一つのことに熱くなるという傾向があるのではないか」という質問に対し、出石氏は韓国では日本に比べて娯楽の選択肢が少ないからそう見えるのではないか、と指摘しました。例えば、日本では以前、百貨店に行くことが休日の家族の楽しみだったように、韓国では近年デパートや映画館が非常に栄えているそうです。

また、聴衆に韓国人の妻を持つ方がいましたが、その方より、「韓国人は冠

婚葬祭や誕生日などの行事のたびに、日本より頻繁に親族が集う習慣があると感じるが､韓国ではどこの家庭でもそうなのか｣という質問がありました。それに対し金氏は、日本でいう何周忌に当たるものが韓国では毎年あるなどの詳しい国内事情を話された上で、その文化は韓国人と付き合っていく上では無視することのできない大切なものだと説明されました。文化理解の重要性を物語るエピソードだと言えます。

最後に、歴史問題への両国メディアのアプローチと国民感情に関する質問がありました。2009 年から今年にかけて、NHK ではスペシャルシリーズとして「日本と朝鮮半島」をテーマとしたドキュメンタリー番組が放送されています。それを受けて､｢歴史問題は日韓の間で非常に微妙なバランスを要求されるものであると考えているが、その制作過程にはどのような苦労があったのか」という質問がありました。出石氏は、歴史を扱うため事実検証を十分に行い、内容が偏らないように異なる意見も取り上げるよう努力していると述べました。一方、金氏は、韓国メディアでは、日本に対して友好的な報道よりも、韓国人の民族感情を刺激するような報道が好まれる風潮が根強く残っていると指摘しました。一方、現在、韓国でも NHK と同じような日韓関係についての番組を制作しており、その番組は中立性を重要視したものを目指していると説明されました。その背景には、民間レベルでは両国民の距離が縮まり、日本は悪であるというイメージが薄れてきていることがあるようです。金氏はそのように変化を遂げつつある今だからこそ、その番組制作に意義があると述べていました。

4. まとめ

日韓併合 100 周年、終戦から 65 年に当たる今年は、日本と韓国が歴史について考える節目として非常に重要な時です。そのような中、NHK 解説委員・

元ソウル支局長である出石直氏、KBS 東京支局特派員の金大弘氏を迎えて行われた今回の日韓メディアトーク。日韓のメディアに深く関わる両氏が、仕事での経験や日々の生活を通じて感じていることはまさに「生の声」であり、私たち学生にとって大変貴重なものでした。

出石氏と金氏は、日韓の歴史や近年の文化・政治・経済といった様々な視点からお話をしてくださいました。植民地時代から終戦、国交正常化、そして今日に至るまで、日韓はしばしば困難な時を経験してきました。韓国社会での反日感情や歴史認識問題など、負の遺産は未だ解決されていないという現実があります。しかし、それらを抱えながらも日韓は成熟した関係を築いていく時期にあると両氏は述べました。そしてその関係を築いていくのは私たち若い世代であり、私たちが互いの理解を深め、協力することが重要だと語られました。

今年、日本にとっては終戦の日、韓国にとっては光復節である 8 月 15 日に合わせて、菅直人首相が日韓関係についての談話を発表し、これは日韓両国において大きな波をもたらしています。このように日韓関係が刻々と変化する今、私たちはこの日韓メディアトークを通して、日韓の歴史を改めて学び、今後の在り方について深く考えることができました。また、これからの 100 年を作るのは私たち若い世代であるという熱いメッセージを受け取り、身が引き締まる思いがしました。21 世紀はアジアの時代と言われる中で、アジアをリードする立場にいる日本と韓国が強固な協力関係を構築することは、両国だけでなく相互依存を高める国際社会において、不可欠であると言えるでしょう。確かに、日韓が歩んできた道のりは平坦ではなく、現在でも両国間には複雑な問題が残されています。しかし両氏のお話を聞き、今後の日韓は強い協力関係を築けるのではないかと思いました。そのためには、歴史を学び問題に正面から向き合うこと、そして、現状を的確に捉え未来を見据えて行動することが求められています。